

# 秩父からの歴博訪問

— 博学連携を考える —

埼玉県立秩父高等学校 青 宏起

## 1. 実施学年及び教科・領域

第二学年 希望者

日本史 B の「中世」及び学校行事「修学旅行」(京都)の事前学習と関連。

歴博(「国立歴史民俗博物館」)訪問事前学習の参加者は、約120名(必修としたクラスもある)。歴博訪問参加者は、19名(1年生2名を含む)。

## 2. 学習のねらいと博物館の活用との関連について

### (1) 単元名

歴博訪問事前学習は、日本史 B 「室町文化」「戦国大名の登場」と関連。

歴博訪問は、第二展示室なので、日本史 B の「国風文化」から中世全般と関連。

### (2) ねらい

学習指導要領との関連

中世の分野では、「歴史の解釈」として「歴史資料を含む諸資料を活用して、歴史的事象の推移や変化、相互の因果関係を考察するなどの活動を通して、歴史の展開における諸事象の意味や意義を考える」とある。今回は、修学旅行(京都)の事前学習として、「洛中洛外図屏風」(歴博甲本)を通して「京都の歴史」を考察した。

### (3) 博物館との関連

#### ① 活用方法 「来館型」

歴博訪問の目的は、「洛中洛外図屏風」(複製)の展示を含む第二展示室(中世)を見学すること。「洛中洛外図屏風」の研究者の小島道裕先生に第二展示室のことや歴博甲本について学ぶこと。加えて第四展示室(民俗)について紹介することにあった。将来、秩父地域の発展を担う生徒たちに、秩父地域の歴史・民俗に関する総合的な博物館をつくる必要性を感じてもらいたいという願いもあった。

#### ② 活用資料

事前学習で「洛中洛外図屏風」床置きパネル(復元版)を使用した。

### (4) 指導観

「歴史の学習において、視聴覚教材や実物教材の活用、博物館等の利用、遺跡や遺物の見学などを取り入れることは、生徒の関心や意欲を高めるとともに学習を深化させる上で効果的である」と新しい学習指導要領にも書かれている。私は、「博学連携」というものを教師の側から取り組むようになって、今年で14年目になる。公立高校の場合には、学校間の格差が大きく、何かを続けていく上で、転勤が「一つの壁」になることがあるが、私は、あえてそのことに挑戦した。

秩父高校は、埼玉県北西部の秩父盆地唯一の進学校で、平成29年に110周年を迎えた伝統校である。生徒の学力幅が大きいこともあり、クラス編成は習熟度別にな

っている。今年度、着任6年目になるが、5年目から持ち上がりで特進クラスの担任をしている。特進クラスは、進学指導に特化したクラスであるが、3年間の学校生活を考えた時、受験のための勉強のあり方とは違う「歴史教育」を、高校生活の前半で実践したいと考えた。そこで2年生の夏に実践したのが、今回の歴博訪問である。

### 3. 指導計画（事前学習2時間扱い）

「歴博訪問」にあたり、事前学習の内容を次の3点とした。

- ① 修学旅行の事前学習の一環として、希望する生徒を対象に「洛中洛外図屏風」について学習する。
- ② 「洛中洛外図屏風」を研究している小島道裕先生の話聞く機会を作る。
- ③ 第二展示室を見学するために、私が展示室の簡単なフロアガイドを行う。

#### ① 『洛中洛外図屏風』（歴博甲本）

過程	時間	○学習活動及び内容	□指導上の留意点 ■評価の観点
導入	3月	○修学旅行通信で「洛中洛外図屏風」を紹介する〔資料1〕。	□秩父と京都をつなぐという視点を大切にしたい。秩父夜祭と飛騨の高山祭、そして京都の祇園祭は、2016年にユネスコ無形文化遺産に登録された。
展開 1	6月 中旬  1時間	○国立歴史民俗博物館の「洛中洛外図屏風」床置きパネル（復元版）を見る。 その際に、歴史民俗博物館振興会発行のミニ屏風の〈読み解き図〉を見ながら、パネルにある付箋を読む作業を行う。 また、床置きパネルを見ることが出来る人数に制約があるため、待っている生徒は、修学旅行通信に掲載した「洛中洛外図屏風」の紹介文を見ながら、資料についての読み解きのワークを行う。 ・「洛中」「洛外」とは何か。 ・歴博甲本は、いつ頃制作されたものか。 ・歴博甲本の制作を発注した人物は誰か。 ・歴博甲本を描いた絵師は誰か。 ・絵の中の付箋は、なぜ「ひらがな」で書かれているのか、など。	□修学旅行の事前学習として、一人でも多くの生徒が、「洛中洛外図屏風」というものの存在を知り、興味関心を持つ。 ■絵の中の付箋を読みながら、観光名所を発見する。  □〔資料1〕の読み解きワークを通して、「洛中洛外図屏風」について調べる。 ■10世紀以降、右京（長安）が衰退し、左京（洛陽）が都市の中心になったこと。左京が「洛中」で、その郊外が「洛外」であること。 ■戦国時代に制作された絵画で、当時細川氏が幕府の実権を握っていたことを知る。 ■狩野派の絵師について知る。 ■「ひらがな」から女性との関連を考える。

展開 2	7月30日  1時間	<p>歴博訪問参加希望者を対象にした、事前学習 (秩父高校地歴科教員による講義)</p> <p>【1】『洛中洛外図屏風』に描かれた京都の名所とその歴史を現代の地図から考える」近藤遼平教諭</p> <p>【2】「戦国時代の小京都『一乗谷』」野坂典広教諭</p> <p>*内容については、[資料2・3]にそれぞれ掲載。</p>	<p>□平安京の位置をトレース・シートを用いて、現代の地図に重ね合わせる。</p> <p>■左京を中心に京都が発展したことを地図と重ねることで認識する。</p> <p>□越前の『一乗谷』という、京都から近いところに、京都の文化が伝わったことが、遺跡として残っている。</p> <p>■『一乗谷』という遺跡に興味関心を持つ。</p>
---------	------------------	---	---

② については、6月上旬に『歴博』第205号の小島道裕先生の「中世から近世へー政治・経済・文化の流れと切れ目ー」をアンケートに答えるために特進クラスで、これを読み感想をまとめた。

7月30日には、歴博訪問参加者が、事前学習に集まった際に、小島先生への質問を考えた。

③ については、私自身が小島先生などからフロアガイドをしていただいた経験を持ち、また、繰り返し音声ガイドを借りて展示を見てきた経験から、KP法を使用した、フロアガイドを準備した。1学期の考査後の授業で、『わくわく！探検れきはく日本の歴史』（中世）を活用した文化史の問題作成を日本史B担当クラスで行った。

#### 4. 実践の概要

(1) 日時 平成30年8月10日(金)

(2) 参加 生徒19名(1年生2名、2年生17名)、引率教員3名

(3) 日程

時間	行動	備考	当日の 実際の 時間
7:10	ちちぶ道の駅集合		7:10
7:30	出発	皆野で、乗車あり	7:30
10:30	国立歴史民俗博物館 到着	事故の影響による渋滞	11:30
10:40	入館 第二展示室 フロアガイド 第二展示室 自由見学 第四展示室(民俗)の紹介	学習シートとして「展示物のスケッチ」と「洛中洛外図屏風の模型」についてのワークシートを活用各自、ガイドレシーバーを使用。	11:40
12:40	昼食		12:40
13:30	小島道裕先生による講演会		13:30
15:00	自由見学		15:00



○中世では、家族で行動する時に男女別のグループで行動していたことに驚いた。風俗画に尼が多く描かれている時と、全く描かれずに夫婦が並んで歩く時とでは、確かに時代の切れ目があるように思った。

③に関連して、歴博の第二展示室がどのような場所か知ってもらうために、出版されたばかりの『わくわく！探検れきはく日本の歴史』（中世）を活用した。生徒の作成した問題を定期考査で使用している。

#### （5）歴博訪問当日

到着が遅れたため、入館後すぐに第二展示室に向かった。第二展示室の展示内容（導線）について、簡単に説明した。生徒には、関連する音声ガイドも聞いてもらった。

〔第二展示室にて〕



授業では、2学期の範囲なので、ここでも中学校で学んだ知識で生徒は展示を見ていく。

左の写真は、「洛中洛外図屏風」をもとに作成した町屋の模型である。用意しておいたシートの問題を生徒が調べているところ。

第二展示室を自由見学したあと、第四展示室〔民俗〕を簡単に紹介した。秩父の夏祭りである川瀬祭りのことや近江商人の「矢尾」のことが展示からわかる。

〔小島道裕先生の講演会〕



講演会の感想の一部を以下に紹介する。

○お話のはじめに、歴史資料は実物を離れてはいけないということをおっしゃっていて、とても心に残りました。洛中洛外図屏風に限らず、資料から歴史を学ぶ時は、無意識に復元などの見やすいものを参考にしてしまうので、小島先生のお言葉を心に刻んで勉強に励もうと思いました。

○私が質問にあげた「町屋の中で一番多くあったのは何屋か」については、屏風を見る限りでは、扇屋が多いが、当時の実態が本当にそうであったかはわからないと教えて頂きました。確信が持てないというところに、さらに興味を持つことができました。

○小島先生は、大切なのは今と昔の相違点とおっしゃっていたが、私が最も興味を持った解答は、のれんの図柄に広告の意があるものは少ないという事である。現在多くの店の前に看板が掲げられている。先生は、近隣の店なので看板は不必要と解答したが、現在近隣の住民しか利用しないような店にも看板が出ているのは、長い歴史の中で看板が文化の1つとして定着したからだと思った。また今の京都の町にも昔の名残で、角に床屋があるという話も興味深かった。特に先生が言った「都市には歴史がある」という言葉に、しっかり土地の歴史を理解することが町づくりにとって必要な事だと考えさせられた。

## 〔訪問の感想〕

○普段の生活の中で屏風を見たり、昔の時代の人々の生活を見たりということが無いので、いい機会だったと思います。調べてみたいことが多く見つかったので、後で調べてみたいと思いました。

○目からうろこだったのは、絵と実際の京都の様子は違うということです。言われてみれば当たり前ですが、その当時の絵を一枚見ただけで、その時代すべてがわかったような気がしてしまうので、多方面から見る目を養いたいなあと思いました。

私はこの屏風を見て“面白いなあ”とか“すごいなあ”なんて大ざっぱな感想しか持たなかったですが、今回の体験をへて何故面白いと感じたのか、何故すごいなあと感じたのかしっかり考えてみたいと思います。

博物館は広く、全然見きれなかったのもう一度行きたいなあと思います。

## 5. 成果と課題

### (1) 成果

私は「博学連携」には、成果と課題があると思います。「博物館は結論を与える場所ではない」ので、展示を見て歴史上の出来事の原因と結果は、教科書に載っていることがすべてだろうか？ という疑問を持ちます。あるいは、教科書に載っていない展示物を見て、興味を持つことは、今の教育改革で求められている主体的な学びにつながるのではないのでしょうか。また、博物館に来て展示の意図を考え始めるようなことが出来たら、そこには、「研究者が歴史像を作る過程」と同じような体験ができるのではないかと思います。

### (2) 課題

進学校を例にあげれば、日本史の受験勉強では、教科書に載っている歴史用語を暗記する。年号を暗記する。教科書の本文、脚注、写真・表などを覚える。教科書に載っている出来事の流れと因果関係を教科書にあるように整理し覚える。資料を見ての問いには、教科書のどこに該当するのかを見分け、教科書の記述に即して答えるなど、受験の準備には、多くの時間が必要です。したがって博物館に行く余裕はないという考えもあります。

高2の夏休みに「歴博訪問」をするという考えは、折衷案のようなものだったかもしれませんが。現実には、部活動等もあり「歴博訪問」をした生徒は少数でした。往復の時間もかかり過ぎました。今後活かしていけたら良いと思います。

最後に、埼玉県の西北部にある秩父高校から千葉県佐倉市の「歴博」まで、鉄道利用で片道135キロ、道路だと片道168キロあり、早くても3時間はかかります。このような遠方から生徒を引率しようと思った理由の一つは、秩父市には歴史民俗系の総合的な博物館がないからです。「歴博」と出会うことで、将来、秩父の歴史を伝えるような博物館を作ろうという生徒が出てくれたらという思いがあります。

## 主な参考文献

小島道裕著 『描かれた戦国の京都』 (吉川弘文館 2009年)

小島道裕著 『洛中洛外図屏風』 (吉川弘文館 2016年)

## 〔資料1〕「描かれた戦国の京都」

### （1）秩父と京都をつなぐ

皆さんも知っているように、秩父夜祭は、飛騨の高山祭、京都の祇園祭と並んで、日本三大曳山祭と言われています。1962年に屋台と笠鉾が、重要有形民俗文化財として国の指定を受けました。その後、関連事業が国の重要無形民俗文化財の指定を受け、さらに2016年に「秩父祭の屋台行事と神楽」が、ユネスコ無形文化遺産に登録されました。伝統を守り、引き継いできた秩父の人々のアピールが、世界で認められたのです。これからの秩父は、国際的な観光都市と発展してくれると素晴らしいなと思います。

この夜祭ですが、「秩父学」の公式テキストによると、「秩父地方の総鎮守・秩父神社の冬季例大祭（12月1～6日）中の3日夜、神社から御神幸行列を仕立て、神賑わいとして屋台・笠鉾が曳行されて「お旅所」へ向かい、祭場で神体山（武甲山）の神を迎えて神事祭典を行い、屋台は奉納舞いを演じる。これが「夜祭」という呼称の生まれた由縁である。そして夜の斎場祭が大祭の中心行事であることから、祭り全体を「夜祭」と呼ぶようになった。」とあります。また、テキストによると、祭礼を記した史料は、万治元（1659）年までさかのぼることができ、また、屋台興行については、享保16（1731）年には、すでに定着していたことが分かっています。

ところで、ユネスコに登録が決まり、この祭りに合わせて「絹市」が復活したのを知っていますか。秩父夜祭は、「お蚕祭り」とも呼ばれてきました。江戸時代から旧暦の11月3日～6日には、1年の最後の「絹大市」が、大宮郷（秩父）でありました。そして屋台興行も、各地の商人たちを秩父に集め、「絹大市」を盛り上げるという性格を持っていました。寛政11（1799）年、幕府の寛政の改革で、風俗取締が行なわれ興行が禁止されたり、第二次世界大戦のためにできなかつたりといった苦難を乗り越えて、現在まで継承されてきました。

京都の祇園祭は、秩父夜祭より歴史は古く、都市に流行する悪疫を退散させるためにはじめられた御霊会のひとつで、現在は七月に行われています。御霊会は、秩父の川瀬祭りと同じ系統の祭りです。祇園祭は、室町時代京都の「室町」を中心に、この地域の商工業者たち中心になって、山鉾の巡行を行ってきました。しかし、応仁の乱（1467～77年）では、京都の町が焼き尽くされ、そのため33年間に及ぶ中断がありました。祭りの継承には、様々な歴史がありますね。

### （2）『洛中洛外図屏風』って何？

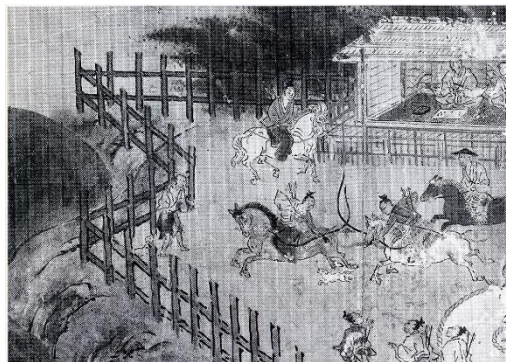
応仁の乱は、京都の町を焼き尽くしたと書きましたが、乱後も疫病や大火によって、戦国時代の京都は、極少化します。この時、京都の町は大きく姿を変えます。元々「平安京」として作られた京都ですが、平安時代の終わりには、左京を中心とし、郊外に発展していました。東の白河・六波羅、南の鳥羽、そして北の北山などです。しかし、戦火によって、20万人近くいたと推定される京都の人口は、一時3万人程度まで減少したと推定されています。このような京都の町が復興した明応9（1500）年、祇園祭も復活します。

さて皆さんは、このように復興した京都の景観を、パノラマ写真のように描いた絵画があるのを知っていますか。その名を『洛中洛外図屏風』と言います。戦国時代から江戸時代にかけて、『洛中洛外図屏風』は、様々な絵師によって描かれました。100あまりの

作品が残っています。現存する最古のものが、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館にある『歴博甲本』と呼ばれるものです。この『歴博甲本』について、国立歴史民俗博物館（略称「歴博」）の資料では、「歴博甲本」について、次のように解説しています。

六面の屏風二つ（右隻・左隻）がセットになった「六曲一双」の形式で、大きさは、それぞれおよそ縦140センチ、横243センチです。

描かれた年代は、十六世紀前半と考えられています。左隻に描かれた幕府は、室町幕府の管領細川高国（1484～1531）が、第12代将軍足利義晴（1511～50）のために、1525年（大永5）に造営した「柳の御所」と言われるもので、細川高国と足利義晴は、戦いに敗れて1年あまり後に京都を離れ、この御所も使われなくなるので、この間に、この政権の関係者が関わって作られたと思われます。



制作したのは、画風や細川高国との関係から、当時各方面の絵を積極的に受注していた狩野派の二代目当主、狩野元信（1476～1559）の工房と考える説が有力です。

#### 【右隻（東隻）】

画面上方を鴨川が横切り、右の方に祇園祭、左の方に内裏が描かれているのが、京都の東側を描いた右隻です。

方位は、右が南、上が東、左が北になります。

画面の上方には、東福寺・三十三間堂・清水寺から比叡山までの東山の名所が点在し、鴨川をはさんだ画面手前側には、右には下京（しもぎょう）の町、左には、内裏と公家屋敷などがある上京（かみぎょう）の町が描かれています。

季節は、左半分が春（正月～三月）、右半分が夏（四月～六月）で、月次（つきなみ）の風俗として、内裏の正月の儀式、鶯合わせ（二月）、鶏合わせ（三月）、灌漑・草刈りと麦刈り（四月）、祇園祭（六月）などが見えます。

#### 【左隻（西隻）】

右上に雪山が描かれているのが、京都の西側を絵がいた左隻です。方位は、右が北、上が西、左が南になります。

画面の上方には、右側の上加茂社・北野社などから左側の嵯峨・大堰川（桂川）までの、京都の北から西の郊外が描かれ、手前には、右側の幕府（柳の御所）・細川邸と、その城下とも言える小川通り付近の町並みを描いています。

季節は、左半分が秋（七月～九月）、右半分が冬（十月～十二月）で、秋の風俗として、盆踊りの源流となる風流（ふりゅう）踊り（七月）や稲の取り入れ、紅葉狩りなどがありますが、「冬」については、幕府の付近を花が咲く春の情景にしたためか、行事はとくにみられません。



[資料2]

『洛中洛外図屏風』に描かれた京都の名所とその歴史を現代地図から考える

埼玉県立秩父高等学校 教諭 近藤 遼平

● 講義の流れ

1. 京都の立地、地理的条件
2. 京都の名所の位置の確認
3. 平安宮の範囲(トレースシートを用いた作業)
4. 応仁の乱の地理的展開
5. 織豊期の京都(聚楽第、本能寺の位置)
6. 江戸期の京都(二条城)

● 概要

今回は洛中洛外図屏風が中心にあるため、京都とその歴史を地理的に概観した。まず平安京の地形は桂川沿いの南西側(右京)の方が低く、湿地が広がり、このために平安京は左京側を中心に発展していったことを確認した。平安京の範囲を確認したところで渡月橋や清水寺など京都の名所や屏風にも描かれている場所を現代の地図上でマークして位置関係を把握し、屏風が示す京都の物理的な空間の広さをイメージさせた。

続いて平安時代の平安宮の位置を現代の地図上で確認するために、平安時代の地図をトレースシートを用いて現代の地図に重ねた。生徒たちは平安宮は二条城から御前通り付近までの大きさを持っていたことを認識した。

そのあとは、屏風の時代に近い中世末期～近世にかけての京都の歴史を、地図を見ながら振り返った。例えば応仁の乱の発端地とされる上御霊神社の場所や東軍の本拠地の相国寺、西陣などの位置を確認し、応仁の乱の地理的な広がりを確認し、争乱の中心は左京の北部中心であったことを学習した。また洛中・洛外の区別の基準となった御土居(堀)の範囲と北野天満宮脇に今でも一部が残存していることを地図上で確認した。

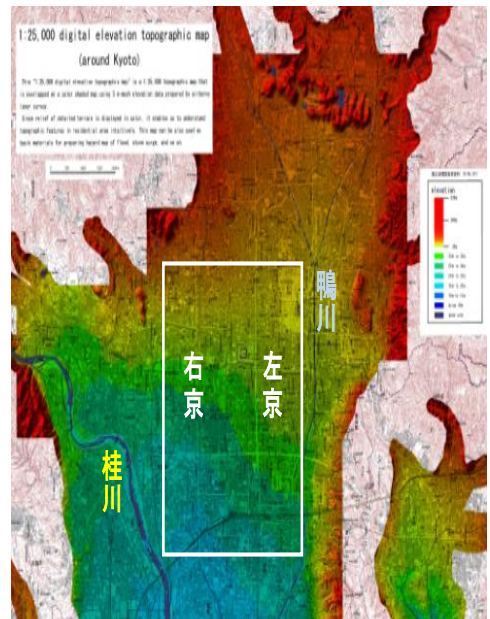


図1: 平安京の範囲と地形の高低

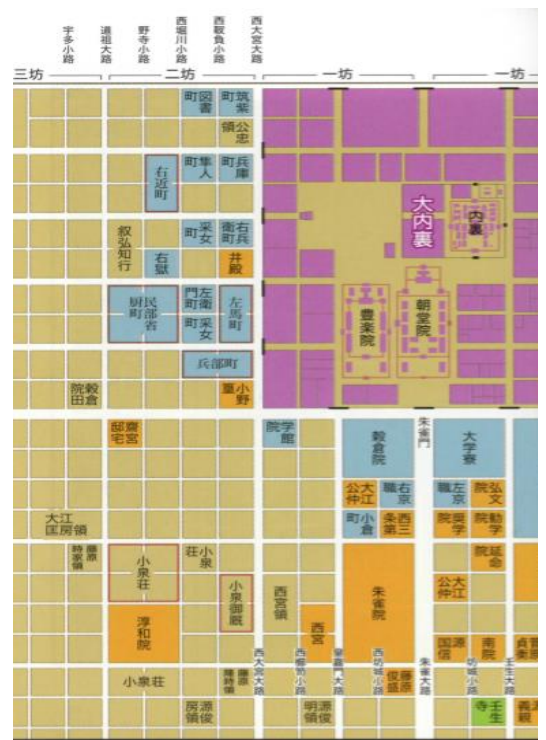


図2: 平安時代の平安宮の範囲とその周辺図。

この図をトレースして現代の地図に重ねた。

### [資料3]

#### 戦国時代の小京都『一乗谷』

埼玉県立秩父高等学校 教諭 野坂典広

今回は、「そうだ、歴博へ行ってみよう！」の事前学習の一環として、「戦国時代の小京都『一乗谷』」というテーマで講義を行った。

一乗谷（資料①）は、現在の福井県福井市城戸ノ内町にあり、戦国時代は越前国の戦国大名朝倉氏の城下町があった谷間の地域である。現在この地域は、当時の遺構が良好な状態で残っているとして国の特別史跡にも指定されている。歴博の第2展示室（中世）には、戦国時代の一乗谷朝倉氏本館復元模型が展示されている。これは一乗谷遺跡の発掘調査の成果に基づいて復元したものである。

講義ではまず、応仁の乱（1467～77年）の結果、京都が壊滅的な被害を受け、公家などの文化人が地方へ下り、文化の地方普及が進んだことで地方に「小京都」が誕生したことを確認した。

次に「一乗谷」の歴史である。一乗谷は応仁の乱以前から朝倉氏の本拠が置かれ、当主の朝倉孝景は1475年に越前国を平定した。応仁の乱以後、多くの公家や高僧、文人、学者たちが避難してきたため一乗谷は飛躍的に発展し、華やかな京文化が開花した。このため一乗谷は「北ノ京」とも呼ばれ、16世紀前半の朝倉孝景の治世には一乗谷の人口は1万人を超えて越前を中心地として繁栄した。しかし1573年、織田信長の侵攻により朝倉義景は自害に追い込まれ、朝倉氏は滅亡し一乗谷も破壊された。以後、越前国の中心は谷間の一乗谷から平野部の福井城へ移った。

最後に、現在の「一乗谷」である。朝倉氏滅亡後は水田や畑が広がり、新たに建造物が造られることがほとんどなかった。そのため1967年から発掘調査が始まると、良好な状態で遺構が残っていることが分かってきた。278haに及ぶ遺跡からは、計画的に区割りされた町並みの跡や当時の生活の様子を示す遺物が出てきている。町並みの一部は現地で実物大で復元され、城下町一乗谷の姿を垣間見ることができる（資料②）。創建当時の建造物は残っていないが、文献調査や発掘調査を通じて当時の姿に迫ることは可能なのである。

資料① 『一乗谷と中世都市』（福井県立朝倉氏遺跡資料館編集、1986年）4頁より

資料② 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館ホームページより

<http://asakura-museum.pref.fukui.lg.jp>



資料① 空から見た一乗谷



資料② 復元された武家屋敷群